

『古代アメリカ』 11, 2008pp. 1-26

＜論文＞

トルーカ盆地のダイナミズム —メキシコ州、サンタ・クルス・アティサパン遺跡のデータを基に—

嘉幡 茂

(メキシコ国立自治大学・哲文学部・人類学調査研究所・博士課程)

【要旨】

テオティワカンと共生関係にあったトルーカ盆地は、テオティワカンの崩壊後、独自の社会発展を迎える。中央であるテオティワカンに従属しながら、何故、この周辺の社会は崩壊の影響を受けることなく発展したのか。本稿の論点は、中央から支配される周辺地域の経済戦略に向かっている。この問題の解明に向け、トルーカ盆地に位置するサンタ・クルス・アティサパン遺跡から出土した搬入土器の肉眼及び空間分析を行う。さらに、これらの結果に基づき、この地域の交易システムの復元を試みる。結論として、トルーカ盆地は単にテオティワカンに従属する静的な存在ではなく、独自の交易システムを確立していたことを指摘する。そして、このような独自の経済戦略が、テオティワカンの崩壊後も社会の安定を維持したと指摘している。

【キーワード】

トルーカ盆地、テオティワカン、搬入土器、交換・交易、独自性、周辺地域

【目次】

1. 問題の所在と研究の目的
2. 交易に関する本稿の視点
3. サンタ・クルス・アティサパン遺跡の搬入土器
 - 3-1. サンタ・クルス・アティサパン遺跡
 - 3-2. 搬入土器の種類と編年
4. 肉眼分析
 - 4-1. 肉眼分析の方法
 - 4-2. 肉眼分析の結果
5. 空間分析
 - 5-1. 空間分析の方法
 - 5-2. 搬入土器の利用価値と分布パターン

- 5-3. 空間分析の結果
 6. トルーカ盆地における交易システムの独自性
 7. おわりに

1. 問題の所在と研究の目的

メキシコ中央高原は、メキシコ盆地、トルーカ盆地、モレロス地域、プエブラ・トラスカラ地域、トゥーラ地域の5つの地域から形成される（図1）。その中でも特にトルーカ盆地は肥沃な沖積平野が広がる。盆地内を南北に走るレルマ川は、チグナウアパン湖（Chignahuapan）、チマリアパン湖（Chimaliapan）、サン・バルトロ湖（San Bartolo）を繋いでおり、農耕に適した地域であるだけでなく、豊富な水産資源にも恵まれている [Sugiura 1998c: 62-70]。その結果、トルーカ盆地は、最盛期でおよそ10万から20万人が暮らしていたと考えられるテオティワカン [Millon 1981: 208] の穀倉庫としての役割が与えられていた [Sugiura 1998b: 108]。これに加え、ゲレロ州（Guerrero）、ミチョアカン州（Michoacán）、モレロス州（Morelos）とメキシコ盆地を結ぶトルーカ盆地は、当時覇権を持っていたテオティワカンにとって様々な物資を輸出入するために欠かせない戦略上の要所でもあった。

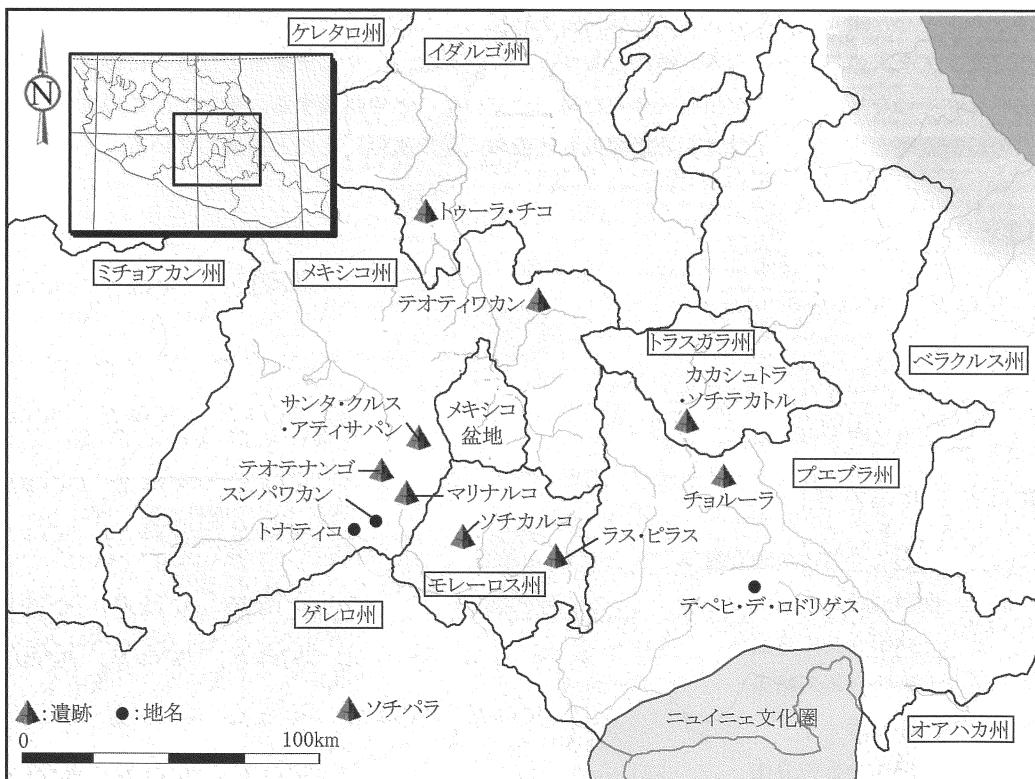


図1 メキシコ中央高原と主要遺跡

テオティワカンとトルーカ盆地との密接な関係は、この初期国家が形成される時期にまでさかのほる。ツァクアリ期（1～150年）には、トルーカ盆地内の人口は減少するが、それは住人がテオティワカン盆地へと流入したためだと考えられている。一方、テオティワカンの発展とともに、この盆地の人口は回復する。さらに、後6世紀から7世紀の間に起こったとされるテオティワカンの崩壊前後から古典期終末期（後600/650～850/900年）にかけ、テオティワカン盆地における混乱を避けるために避難してきた人々によって、トルーカ盆地の人口が激増する [Sugiura 1998b, 2005a]。

上記のトルーカ盆地の地政的重要性、および、セトルメント・パターンに見られるテオティワカンの影響のみならず、テオティワカンの文化的影響は、土器様式、土偶のモティーフ、建築スタイルなどの考古学データに表れている [e.g., Giles F. 2002; Figueroa S. 2006; Silis G. 2005; Covarrubias G. 2003]。これらのデータから、トルーカ盆地はテオティワカンの発展に伴い、早くからその支配下に置かれていたことが指摘されている [Sugiura 1998b: 106–111, 2005a: 293–294; González de la Vara 1999: 193–195]。

しかしながら、テオティワカンの崩壊後、何故そしてどのようにトルーカ盆地の社会が、一時期であるにせよ混乱の時期を克服し、テオティワカン盆地からの人口を収容したのかについてよく理解されていない。メキシコ盆地の周辺地域では、テオティワカンと密接な関係にあった遺跡の多くが放棄され新興勢力が台頭してくる。例えば、モレーロス地域ではソチカルコ（Xochicalco）が、プエブラ・トラスカラ地域ではカカシュトラ・ソチテカトル（Cacaxtla–Xochitécatl）が、トゥーラ盆地ではトゥーラ・チコ（Tula Chico）が、影響力を持ち始める。これに対し、トルーカ盆地ではこの時期、新たな勢力というものが成立していない。古典期後期（後450～600/650年）から古典期終末期にかけ人口は増加するものの、古典期（後200～600/650年）に存在していた約70%の遺跡が古典期終末期にも認められている [Sugiura 2005a: 284–285]。トルーカ盆地はテオティワカンを中心とした政治・経済組織に大きく依存していたはずであり、その消滅はトルーカ盆地に甚大な影響を与え、継続的な社会的安定を維持することが困難であったはずである。しかしながら、同盆地の古典期後期から終末期にかけてのセトルメント・パターンの連続性からは、他地域では見られたような大きな社会変化を読み取ることができない [e.g., García C. 1974; Mastache *et al.* 2002: 51–76; Canto A. 2006]。逆に、トルーカ盆地の諸社会は安定していたと考えられる。

テオティワカンの支配とその衰退に、トルーカ盆地の社会がどのように対応し、上記の社会的安定を維持できたのか。トルーカ盆地の経済戦略の面から、この問い合わせ一つの仮説を提示することが本稿の目的である。

本稿ではトルーカ盆地の南東部を治めていた地方都市サンタ・クルス・アティサパン遺跡（Santa Cruz Atizapán）に注目する¹。この遺跡から出土した搬入土器の肉眼分析、および、遺跡内で出土している土器の空間分析を通して、古典期後期と終末期で搬入土器の交易システムにどのような変化があったのかを分析する。特に、遺跡内の空間分析から、サンタ・クルス・アティサパン遺跡の搬入土器にどのような利用価値が与えられていたのかを考察し、生産地との交易関係を復元する。最終的に、テオティワカンの支配下にあった時期とその後の交易システムの変化を考慮して、上記の問題点を解明する。

2. 交易に関する本稿の視点

古典期のメキシコ中央高原は、テオティワカンが政治、経済そして宗教の中心地として発展し、遠・近距離の交易活動を通して、様々な資源や製品が流通する世界であった。そして、このような交易システムは、テオティワカンという国家主導の下で実施されていたと考えられている [e.g., Millon 1981, 1992; Charlton 1978, 1984; Spence 1981, 1984, 1987; Hirth and Angulo V. 1981; Santley 1983, 1984, 1989; Santley et al. 1986; Santley and Alexander 1996; Santley and Arnold 2004; Kolb 1986, 1987; Manzanilla 1983, 1992, 1997; Price 1986; Carballo 2005]。特にケリー [Kelley 2002 [1979]] は、テオティワカンの経済システムが再分配および市場システムに基づいていたことを早くから主張し、様々な原材料の獲得や製品の生産そして流通を円滑に機能させるため、マヤ地域のカミナルフュー遺跡 (Kaminaljuyú) やメキシコ北部のアルタ・ビスタ遺跡 (Alta Vista) などに商業拠点を築いていたと述べている。この観点に影響を受けているサントリー [Santley 1983, 1984] は、オアハカやマヤ地域におけるテオティワカンで生産された黒曜石製品の分布と出土量を分析し、製品が各商業拠点を経て遠隔地に向かうモデルを提示している。

このようなテオティワカンから周辺を見る視点が交易関係の分析において主流である背景には、テオティワカンの文化的な影響力が広くメソアメリカ地域一帯に見られることと無関係ではない。その影響力は、土器様式や建築様式、そして石彫に表れるモティーフなどから証明されている [e.g., Coggins 1983; Culbert 1993; Marcus 1983, 2003; Ortiz and Santley 1998; Stuart 2000]。他方、各地域からテオティワカンへと、人や物資の流れが活発であったことも様々なデータから理解できる [e.g., Kolb 1987; Rattray 1987, 2001: 306–354; Manzanilla 1992, 2004, 2006; Daneels 1996; Gazzola 2004; Rosales de la Rosa 2004; López J. 2006]。しかしながら、テオティワカンを中心に復元された交易関係のモデルは、テオティワカンという古代都市がより強大であり、周辺は単に従属する静的な存在であったとの虚像を無意識の内に研究者に植えつける。特に、メキシコ中央高原では、テオティワカンの後背地とされる地域での調査が限られており、この傾向は顕著である。

近年、ウォーラースtein [Wallerstein 1974] によって提唱された近代世界システム論が、考古学の分野にも導入されている²。特に、チエース・ダンとホール [Chase-Dunn and Hall 1991, 1997, 2000; Hall and Chase-Dunn 1996] の研究は、古代社会に複数の世界システムが存在するという前提に、中央対周辺の関係が必ずしも後者が前者に従属するものではなく、中央が周辺地域にも依存する社会のダイナミズムを認めている。さらに、この周辺地域の動的な存在が、中央の霸権を永続させない原因になっていると考えられる。このような周辺における社会的・歴史的重要性を認識する立場は、周辺地域を分析する際に重要である。しかしながら、周辺は単に中央と繋がっているのではなく、中央対周辺の二項対立的な枠組みを越え、周辺地域を分析する。

ス泰イン [Stein 1999] は、世界システム論に影響を受けながらも、中央対周辺の構図から周辺を分析する視点に固執していない。彼は、古代の複雑社会を理解する理論的枠組みが、1960年代以降に主流であったプロセス考古学の「社会を一つの統合されたものとして定義する観点」から、「社会はより多様であり、一つの統合体とはみなさず、部分的に重なり競合する複数のグループで構成される曖昧なネットワークとして認識する観点」に変化していると指摘している

[Stein 1999: 6]。さらに、地域間の相互関係を理解する際に、決して中央から周辺へと流れる一方の分析ではなく、多数の地方システムによって社会が形成されるという観点が必要であると主張している [Stein 1999: 170-176]。

本稿は中央対周辺の枠組みで周辺社会を解釈するのではなく、スタインの視点に影響を受け、周辺と周辺がどのように関係していたのかという観点で、先に述べたトルーカ盆地における独自性の問題を考察する。

3. サンタ・クルス・アティサパン遺跡の搬入土器

3-1. サンタ・クルス・アティサパン遺跡

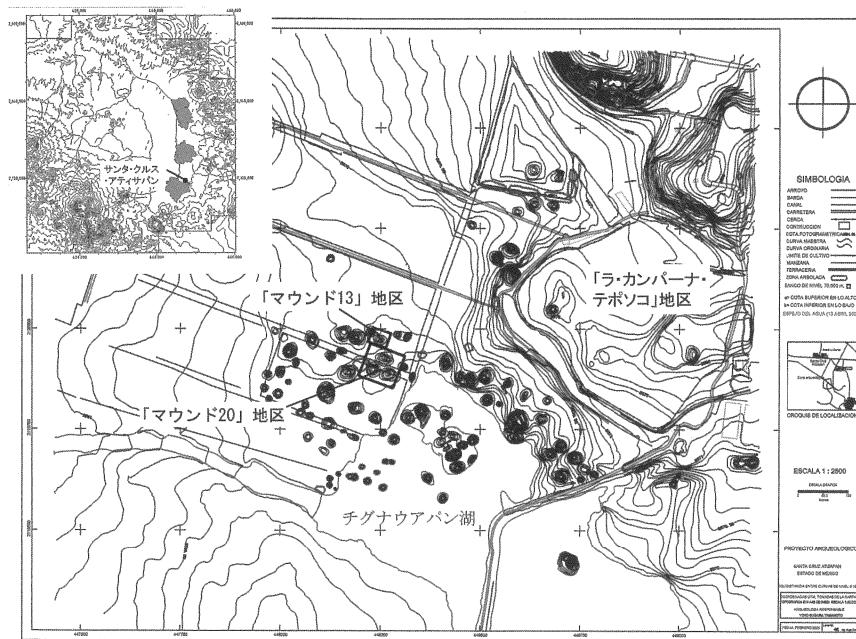


図2 サンタ・クルス・アティサパン遺跡の測量図 (Sugiura 1998: fig.1より転用・加筆)



図3 雨季におけるサンタ・クルス・アティサパン遺跡の風景 (© Proyecto Arqueológico del Sitio de Santa Cruz Atizapán)

本稿で分析対象となる搬入土器は、すべてトルーカ盆地南東に位置するサンタ・クルス・アティサパン遺跡の「マウンド20」地区³および「マウンド13」地区⁴から出土したものである（図2）。遺跡の時期は、古典期後期から古典期終末期の間に帰属している。古典期後期にはテオティワカンの支配を受け、その衰退後の終末期に繁栄期を迎える。トルーカ盆地の南東部一帯を政治・経済的に支配する地方センターにまで発展したと考えられている。遺跡全体の占有面積は3平方kmを越えていたと推測されており、マウンドが約100基確認されている。これらの大部分は一般住居址であったと考えられている [Sugiura 2005b: 319]。また、これらのマウンド群の東に位置する「ラ・カンパーナ・テポソコ (La Campana-Tepozoco)」地区が、サンタ・クルス・アティサパンの政治的・宗教的中心地として機能していた [Sugiura 1998b, 2005a: 265–268]。当遺跡がチグナウアパン湖岸に建設されていることから（図3）、農耕による生産基盤の他に、水産資源を中心とする盛業が活発であったと考えられている。湖には葦が生い茂り、多種にわたる魚類、鳥類、両生類、甲殻類そして昆虫が棲息している。

上記のようにサンタ・クルス・アティサパン遺跡が、古典期後期から終末期にかけて機能していたため、この遺跡から出土している搬入土器を通時的に分析することによって、テオティワカン崩壊前から崩壊後にかけての交易システムの変化を解明することが可能になると見える。一遺跡から得られる分析結果を、トルーカ盆地全体の傾向として認識するのは危険であるが、サンタ・クルス・アティサパン遺跡では様々な物資や人の流れが活発であった地方センターとして栄え、トルーカ盆地南東部を支配していたことを考慮し、少なくともここから得られる分析結果は、この地域内部の傾向を反映していると理解できる⁵。

3-2. 搬入土器の種類と編年

1997年に行われた「サンタ・クルス・アティサパン遺跡発掘調査（団長：杉浦洋）」の1次調査から、総数81,926点の在地ならびに搬入土器の土器片が回収されている。本稿では1次調査から回収された搬入土器と、2次および3次調査で出土したすべての搬入土器を肉眼分析の対象とした（総数：16,372点）⁶。

サンタ・クルス・アティサパン遺跡の搬入土器は、胎土によって6種類に分類した。各種類の時期決定は、フィゲロア・S [Figueroa S. 2006] によって提示されている土器編年、そして各遺物の層序および遺跡で発見されている建造物とその床面の層位関係（図4）に基づき決定した。特に建造物と床面の位置そしてそれらの相互関係から、サンタ・クルス・アティサパン遺跡を4つの時期（レベルIからIV）に分けることにする。レベルIとIIは古典期終末期（アテンコ期）、レベルIIIは移行期（ティラバ・テハルバ期）、レベルIVは古典期後期（アスカポツアルトンゴ期）にそれぞれ対応する。

4. 肉眼分析

4-1. 肉眼分析の方法

分析対象のすべての土器片を、①胎土、②焼成具合、③混和材の有無、④器形、⑤表面調整（ミガキ、ヘラ、ナデ）、⑥スリップの有無、⑦装飾の有無、⑧炭化物や媒の有無、の8項目を基

準に分析した。大部分の土器片は、口縁部の残るものを除き、器形を特定できない大きさであったが、器種を復元できると考えられる表面調整から決定した⁷。

4-2. 肉眼分析の結果

① 雲母多量包含土器 (Mica Abundante: MA)

総数3,683点を分析した。この土器の特徴は、胎土に長さ1mm程度の雲母が大量に含まれることである。混和材として意図的に利用されたのかは不明である。器形の大部分(99.6%)は壺(olla)であり(図5)、古典期後期(レベルIV)に集中して出土している(図6)。この土器の生産地はまだ同定されていないが、類似した土器がソチカルコ遺跡から出土している。ハースら[Hirth 1998: 459; Cyphers and Hirth 2000: 123]の報告によると、ソチカルコで出土するこの種の搬入土器は、プエブラ州、ゲレロ州、オアハカ州(Oaxaca)にまたがって位置するミステカ・バハ地域(Mixteca Baja)のニュイニエ文化圏(Nuñe) [e.g., Winter 2006: 105–115, 2007: 83–86]から来たものだと同定されている(図1)。サンタ・クルス・アティサパン遺跡で出土するこの土器も同文化圏から搬入されたものである可能性が高い。

② 厚手オレンジ色土器 (Engobe Anaranjado Grueso: EAG)

総数7,344点の内、大部分の器形は壺である。主に、壺形土器の外面全体および内面の口唇部から頸部にかけ、厚さ0.5mm程度のオレンジ色のスリップが認められる。粘土の水簸が悪く、胎土には夾雜物の混入が多い。帰属時期は、レベルIII(移行期)からレベルI(古典期終末期)にかけてであるが、大部分が古典期終末期に集中している。先行研究により、この土器の分布範囲が分かっている。北限はトルーカ盆地の南部、南限はメキシコ州とモレロス州の州境にあたるトナティコ(Tonatico)やズンパワカン(Zumpahuacán)、東限はソチカルコ遺跡周辺での出土が報告されている[Sugiura and Nieto H. 1987; Hirth and Cyphers G. 1988: 80; Hirth 1998]。生産地は同定されていないが、この搬入土器の分布圏から考えると、比較的トルーカ盆地に近い場所で生産されていた可能性が高い。

③ 細粒石包含桃白色土器 (Rosa Granular: RG)

969点を肉眼分析した。胎土には石英や長石と考えられる細粒が見られ、焼成温度は他の搬入土器と比較し高温である。器形の大部分は、把手付長頸壺(Ánfora)である。サンタ・クルス・アティサパン遺跡では、この土器は古典期後期(レベルIV)に集中している。ゲレロ州に位置するソチパラ遺跡(Xochipala)では、この土器が先古典期中期(前1200~前400年)から古典期終末期まで連続して出土していると報告があり[Schmidt S. 1990: 123–133; Reyna R. 2003: 152–156]、さらにソチカルコ周辺でも長期にわたり出土している[Hirth and Cyphers G. 1988: 42–45]。同時期に出土量が偏る雲母多量包含土器がテオティワカンから出土していないのに対し、細粒石包含桃白色土器の出土はテオティワカンからも報告されている[Rattray 2001: 340–354]。ラトレイ[Rattray 2001: 340]は、この土器の出土は、テオティワカンへの貢納品を収める器として利用されたか、商業活動の結果による可能性を示唆している。同時に、モレロス州東部の拠点として建設されたテオティワカンの衛星都市である

ラス・ピラス遺跡 (Las Pilas) からの出土も報告されている [Rattray 2001: 340]。生産地として、ソチバラ遺跡の近くに位置するモレロス州とゲレロ州の州域が指摘されている [Rattray 2001:344–345]。

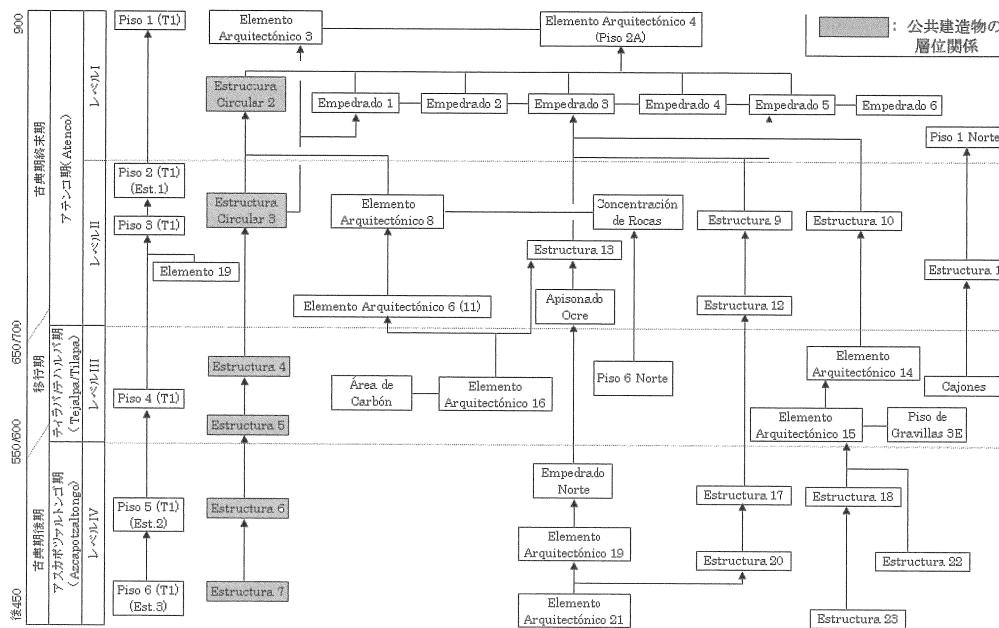


図4 「マウンド20」地区で発見された建造物の帰属時期と層位関係

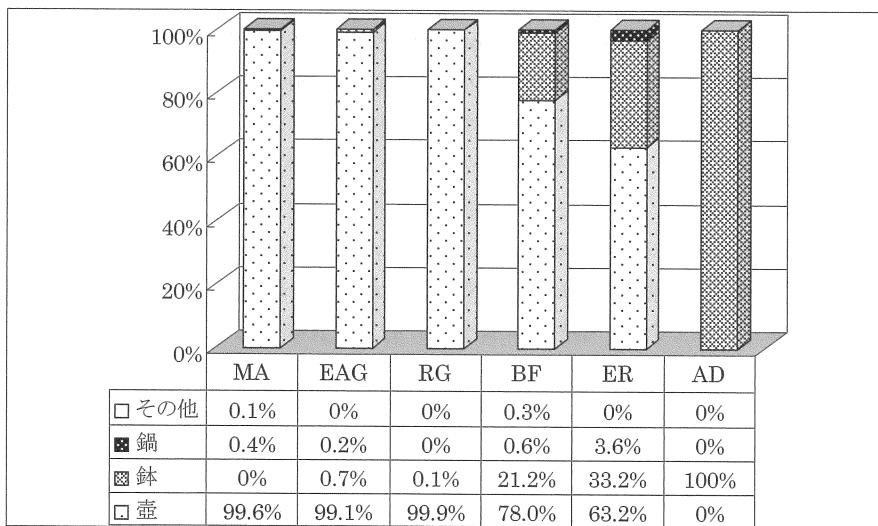


図5 各搬入土器における器形別出土量（「その他」には、皿形、花瓶形土器が含まれる）

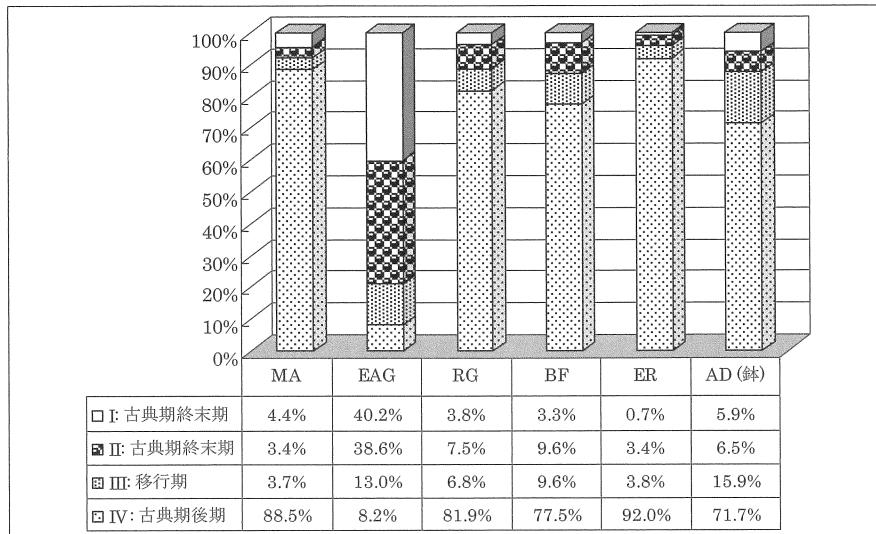


図6 壺形土器の帰属時期（AD以外の土器様式では壺形土器が主流であるが、ADは鉢形土器が主流を占めるため、これに関しては例外的に鉢形土器を比較資料として使用する。パーセンテージは各種の土器ごとに計算されている）

④ 搬入粗製土器 (Burda Foránea: BF)

3,098点を分析した。上記の種類と同様に、出土土器の大部分は壺形である。また、時期も古典期後期に偏っている。胎土に夾雜物が目立つ。外面に黄褐色のスリップが施されているが、均質ではなく部分的に塗られている。現在のところ、この土器の生産地や分布に関する報告はない。

⑤ 赤色土器 (Engobe Rojo: ER)

分析対象である938点の内、約78%が壺形土器であり、その内の大部分が古典期後期に属する。壺形土器の外面に赤色から暗赤色のスリップが施されている。鉢形土器にも同様のスリップが認められるが、外面よりも内面全体に丁寧に塗られている。搬入粗製土器と同様に、この土器の生産地についての情報はない。

⑥ 薄手オレンジ色土器 (Anaranjado Delgado: AD)

総計340点を分析した。器形はすべて鉢形である。薄手オレンジ色土器の一大生産拠点は、プエブラ州南部のテペヒ・デ・ロドリゲス地域 (Tepexi de Rodríguez) にある [Rattray 1990]。テオティワカンのみならずメソアメリカ各地域で出土するこの土器の存在は、テオティワカンと政治・経済的な関係があった証拠を指摘する重要な遺物として認識されている [Rattray 2001: 310]。特にマヤ地域では、埋葬施設から副葬品として出土する事例が多く、この地域のエリートとテオティワカンの関係を構築するために用いられていたと考えられる [Ball 1983]。しかしながら、テオティワカンがこの生産地を直接支配していたのかは不明である。これに関して、ラトレイ [Rattray 1998] は、テオティワカンがこの地を支配したのではな

く、テオティワカンとこの地を結ぶ交易ルートをコントロールしていたと考えている。テオティワカンにおいても、この土器は搬入土器として分類されるが、器面に描かれる紋様やデザインは、テオティワカンに特有のものであり、テペヒ・デ・ロドリゲス地域の陶工たちは、テオティワカンのエリートからのオーダーを直接受け生産していたと考えられる [Rattray 2001: 310]。

各搬入土器の主要器形から興味深いことが理解できる（図5）。薄手オレンジ色土器を除き、他のすべての種類の主要器形が壺形である。では、在地土器ではどの器形がより一般的であったのだろうか。1次調査から回収されたすべての在地土器の土器片の内、12,781点が古典期後期（レベルIV）に属する。この中で5,938点（46.5%）が壺形土器の破片である。また、古典期終末期（レベルIとII）でもこの傾向は変わらず、51.2%（30,516/59,623点）と半数以上の割合を示している。在地土器の壺形土器の出土量比率と比較し、搬入土器の割合が圧倒的に高いことは、この土器がどのように利用されていたのかを知る上で重要な手掛かりになると考えられる。

一方、搬入土器の各種類の帰属時期の分析からも興味深いことが理解できる（図6）。厚手オレンジ色土器を除き、他のすべての種類の土器が古典期後期に際立って出土している。つまり、テオティワカンの崩壊前に、サンタ・クルス・アティサパン遺跡で多数の種類の搬入土器が確認され、崩壊後それらが減少し、厚手オレンジ色土器の出土量が増えるのである。

これら2つのパターンが何を意味するのか考察することは、テオティワカンの崩壊前後の交易システムを理解するうえで重要であると考える。これに関して、後に空間分析の結果とともに解釈する。

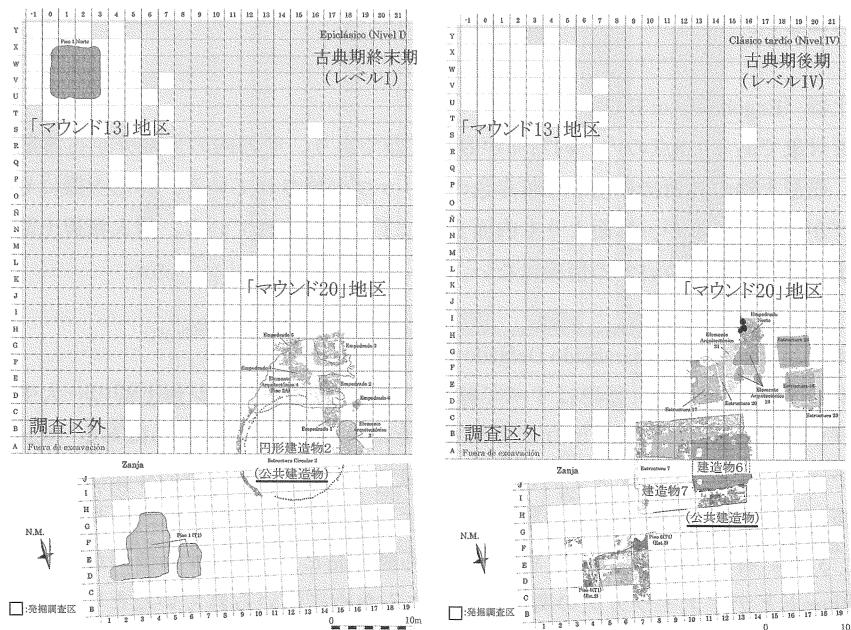


図7 古典期終末期（レベルI）と古典期後期（レベルIV）における遺構配置図

5. 空間分析

5-1. 空間分析の方法（図7）

先の章で見たように、薄手オレンジ色土器を除き、搬入土器の中で壺形の器形が最も多いことが理解できた。従って、この章では壺形土器がどのように出土しているのかその空間分布を分析する。薄手オレンジ色土器の出土量は、他の搬入土器と比較し乏しいため、本稿では、分析対象外とした。また、各種類の壺形土器の帰属時期ならびに出土量を考慮し、本稿では2つの時期を比較する。厚手オレンジ色土器を除くすべての搬入土器は古典期後期（レベルIV）に集中して出土しており、一方、厚手オレンジ色土器は、古典期終末期（レベルI）の時期に最も出土しているため、これら2つの時期のものを分析対象とする。

空間分析に使われる土器片は、出土地点および出土状況が正しく把握されているもののみを対象とした。結果、雲母多量包含土器は3,029点、厚手オレンジ色土器は2,785点、細粒石包含桃白色土器は741点、搬入粗製土器は1,811点、赤色土器は451点をサンプルとした。

5-2. 搬入土器の利用価値と分布パターン

搬入土器の生産地とそれらの土器が出土する遺跡の関係を考察する際、それらの土器を「搬入土器」という一つのカテゴリーとして分析するのではなく、異なる土器には異なる利用価値があった可能性を検証する必要がある。何故なら、その土器の利用価値の違いは、生産地と搬入側の政治的・経済的関係の違いと深く関係していると考えられるからである。つまり、搬入土器の利用価値を検証することで、生産地と搬入側の関係を復元するのに役立つのである。

搬入土器の利用価値は、土器自体の分析から復元できるが、それとともに、その土器がどのように利用され廃棄されたのか、そのコンテクストからも推測可能である。本稿では、土器の利用価値によって、出土状況ならびに出土分布パターンが異なるという前提の基、以下に述べる4つの利用価値とその分布パターンを想定する。

まず、土器自体に社会的価値のあるものが挙げられる。これには2つの側面が考えられる。

- ①良質の粘土を使用し、成形技法は精巧であり、外面への装飾性が高い場合である。この場合、搬入土器自体が単に経済的な交換の対象となるのみならず、芸術的あるいは宗教的な価値が

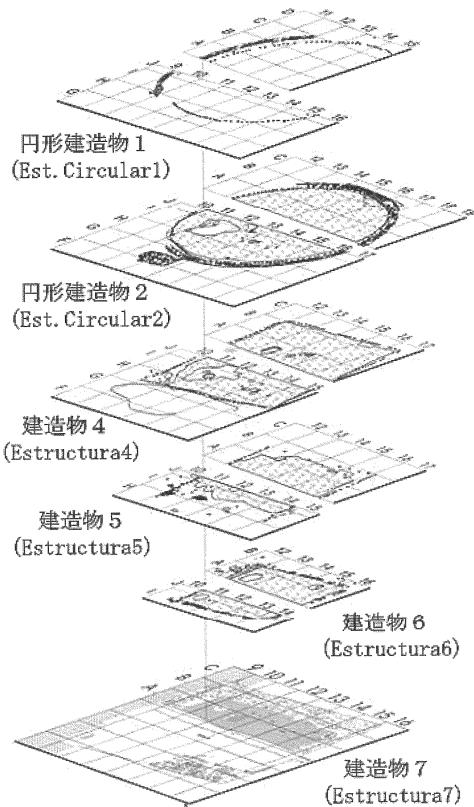


図8 公共建造物の層位関係 (Covarrubias G. 2003: fig. 151より転用・加筆)

与えられ威信財として利用される場合が多い。テオティワカンで出土する土器を例に挙げれば、薄手オレンジ色土器に相当する。この種の土器は埋葬施設など特定の場所から出土するケースが多いため、偏った分布を示すことが予想される。

②もう一つは、土器自体に価値があるものの、紋様や化粧漆喰または多彩色による器面への装飾性が乏しい場合である。このような土器は、威信財として利用されるよりも、土器自体が一つの財として交換の対象（物々交換や市場交換を含む）になることが考えられる。この場合、①の分布パターンよりもより多様な傾向を示すと考えられる。

さらに、土器自体の社会的価値が重要でない場合を考慮しないといけない。

③搬入土器が、その地域の特産物、例えば塩、蜜、ブルケなどを輸送する容器として利用される場合である。この種類の搬入土器は、土器の内容物が日常生活品として利用されれば、住居址など、祭祀儀礼に利用されれば、これに関連する施設からの出土量が目立つと考えられる。

④最後に、土器自身が①～③の特別な利用価値を失い、在地土器の機能と同様に、日常生活で再利用される場合である。この場合、出土傾向は、在地土器のそれと変わらず、住居址およびその周辺から、または、遺跡内のゴミ捨て場や包含層などに偏ると思われる。

先に述べたように、「マウンド20」は一般住居群であったのみならず、その中心部に公共用の建造物を備えていたことで [Covarrubias G. 2003]、他のマウンドと規模および性格が異なる。時期の異なる6基の公共建造物が確認されている（図4・8）。上記の利用価値の相違から、もし6種類の搬入土器の用途が多様であったのなら、この公共建造物やその周辺と、その他の一般住居群周辺の搬入土器における空間分布に何らかの変化が認められることが予想される。しかしながら、在地土器と同様の機能として再利用されるケースであるのなら、分布は④で述べたパターンを示すと考えられる。

サンタ・クルス・アティサパン遺跡で出土している搬入土器の空間分析を行うことは、単に先に示した利用価値の復元のみならず、生産地との政治的または経済的関係を解明する上で重要である。最終的に、ここから得られるデータとともに、トルーカ盆地と生産地との交易関係を考察する。

5-3. 空間分析の結果

図9は古典期後期（レベルIV）における雲母多量包含土器、細粒石包含桃白色土器、搬入粗製土器、赤色土器の出土量を平面的に表したものである。以下では土器の種類ごとに出土傾向を見していく。

① 雲母多量包含土器

幾つかの土器片集中部が確認されているが、建造物6および7（公共建造物）周辺からの出土量は多くない。公共建造物の北側に位置する住居址群周辺での出土量が目立っている。特に、図中の「C (=Concentration : 土器片集中部) 1」と「C2」において出土量が高いことが理解できる。「C1」は、「建造物3床6 (Estructura 3 Piso 6)」（一般住居址）の建物内外部に位置している。一方、「C2」では、ゴミ捨て場と同定された遺構が発見され、ここから搬入土器だけではなく、在地土器の破片も大量に出土している [Sugiura 2002: 58]。

② 細粒石包含桃白色土器

雲母多量包含土器と同様に、公共建造物の北側からの出土が目立つ。「C1」は「建造物3床6」の建造物の外側に位置している。「C2」では、かなり集中してこの種類の土器片が出土している。しかしながら、この集中部と何らかの関連を示す遺構や特別な遺物の報告はされていない。「C3」は住居址の外側に位置している。「C4」は、この「マウンド20」地区の住居址群の境界外に位置している。

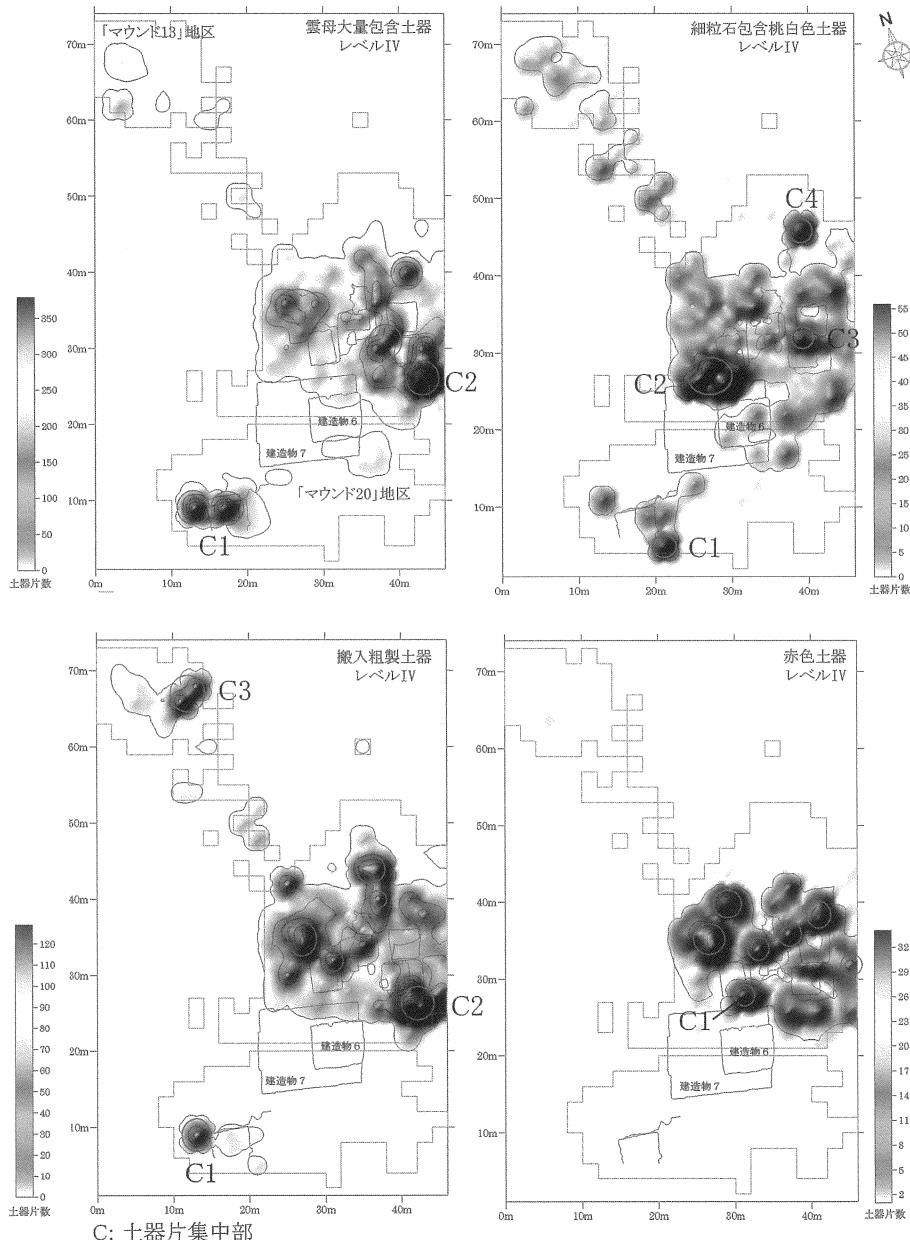


図9 古典期後期（レベルIV）における搬入土器の出土量分布図（左上：雲母多量包含土器；右上：細粒石包含桃白色土器；左下：搬入粗製土器；右下：赤色土器）

③ 搬入粗製土器

雲母多量包含土器と比較的類似した出土傾向を示している。「C1」および「C2」の集中部をはじめ、公共建造物の北側に土器片が集中していることが理解できる。一方、「マウンド13」地区での集中部（「C3」）の存在が、雲母多量包含土器と異なるパターンを示している。

④ 赤色土器

公共建造物の北側のみで出土している。その大部分は住居址の外側から発見されている。公共建造物内部での出土がほぼ皆無であることが特徴的である。

次に古典期終末期（レベルI）の厚手オレンジ色土器の傾向を述べる（図10）。

⑤ 厚手オレンジ色土器

サンタ・クルス・アティサパン遺跡が古典期終末期に絶頂期を迎えることを反映して、土器の散布状況も、「マウンド20」地区全体に広がっていることが理解できる。特に「マウンド13」地区では、この土器の分布から（「C4」）、古典期終末期に人々の生活がより活発に行われていたことが分かる。土器片の集中具合は、「円形建造物1」周辺よりも、住居址が存在していた場所、あるいは、なかった地域に集中している（「C1」と「C3」）。「C2」は公共建造物に密接しているが、この場所から在地土器が大量に出土した土器溜まりが発見されている [Covarrubias G. 2003: 69]。

各種類の搬入土器の傾向には、幾つかの土器片集中部があることが理解できた。しかしながら、これらは副葬品として埋葬施設内部からではなく、ゴミ捨て場や包含層から出土している。同時に、大部分が住居址周辺やその床面、または「マウンド20」地区の住居群外に分布している。ここから一つの可能性として、サンタ・クルス・アティサパン遺跡で出土している搬入土器は、薄手オレンジ色土器のように政治的・宗教的シンボルを表す用途では利用されなかったと示唆することができる。

一方、搬入土器の出土量分布と比較し、在地土器に何らかの相違が見られるのだろうか。図11は、「サンタ・クルス・アティサパン遺跡発掘調査」の1次調査で発掘された調査区であり、「マウンド20」地区の南に位置する⁸。先に見た図9の雲母多量包含土器、細粒石包含桃白色土器、搬入粗製土器の「C1」と図11の「C1」の土器片集中部とはほぼ一致している。図10の厚手オレンジ色土器と図11の上図（レベルI）に、若干の相違が認められるものの（図11の「C3」）、比較的

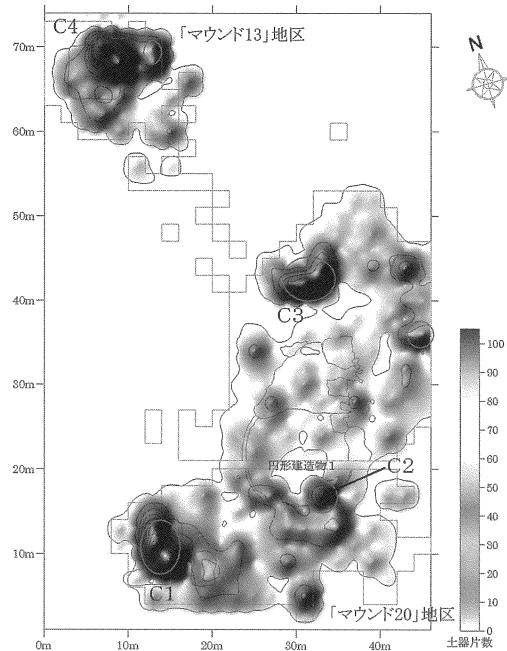


図10 古典期終末期（レベルI）における厚手オレンジ色土器の出土量分布図

良く似た分布傾向を示していると思われる。在地土器の両時期とも、公共建造物の位置する地域からの出土は乏しい。

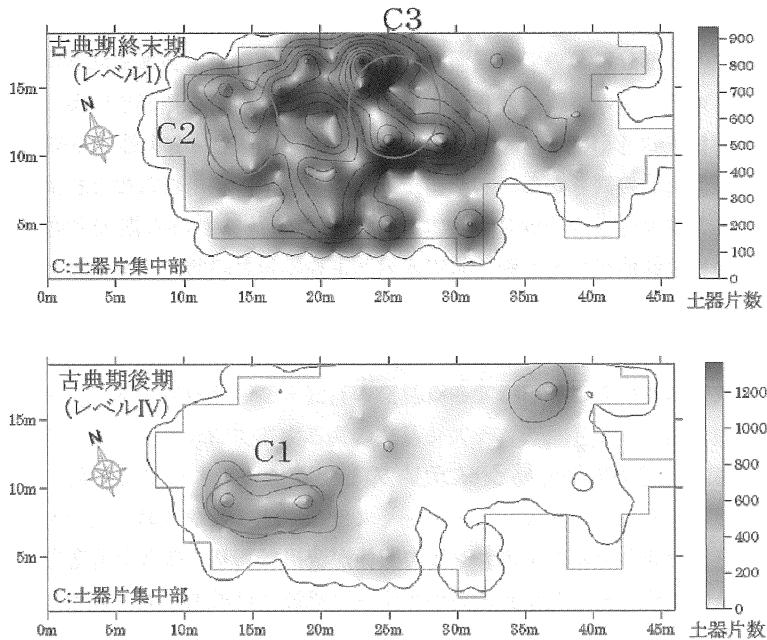


図11 在地の壺形土器における土器の出土量分布図（上：古典期終末期（レベルⅠ）；下：古典期後期（レベルⅣ））

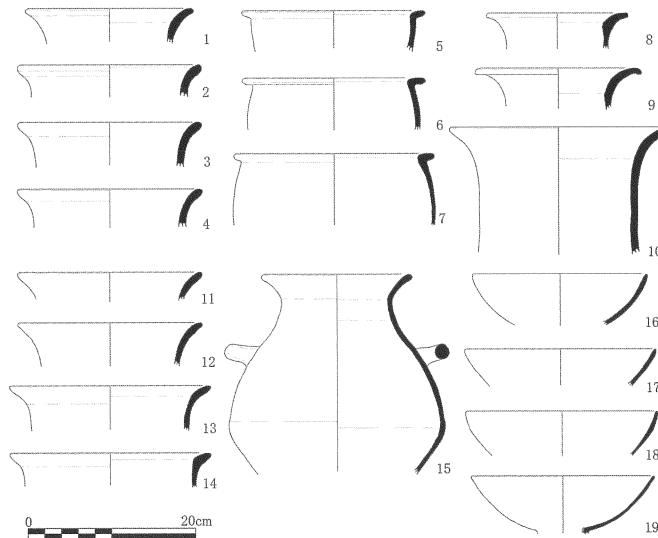


図12 搬入土器の実測図（1-4：雲母多量包含土器；5-7：厚手オレンジ色土器；8-10：細粒石包含桃白色土器；11-14：搬入粗製土器；15-17：赤色土器；18 y 19：薄手オレンジ色土器）

ここで搬入土器の用途をさらに限定するため装飾性を考慮する必要がある。雲母多量包含土器を除き、他の種類のものはすべてスリップが施されている。しかしながら、それは丁寧には塗られおらず、装飾性を考慮して施されたとは考えられない。また、細粒石包含桃白色土器を除き、他の種類の土器片の大部分において、器面内外面には、煮炊き用に利用された痕跡を示す炭化物や煤が確認されている。この痕跡は、在地土器の壺形土器にも確認されている。細粒石包含桃白色土器に関して、ラトレイ [Rattray 2001: 340] は、何らかの消耗品を保管する器として利用された後、この土器の保水性の高さから、水を蓄える容器として再利用されたと指摘している。

以上の考察から、本来サンタ・クルス・アティサパン遺跡における搬入土器は、本来「5-2」で述べた②か③の利用価値が与えられ、④で述べたように、最終的に在地土器と同様に利用され投棄されたものであると考えられる。その結果、搬入土器が生産された地域やそれをコントロールしていた組織とこの遺跡との関係は、朝貢や再分配に基づく政治的ものではなく、両地域間における対等な交換であったことが示唆できる。

6. トルーカ盆地における交易システムの独自性

冒頭で、トルーカ盆地とテオティワカンとの関係が密接であり、後者が前者を支配していたことを述べた。これは、サンタ・クルス・アティサパン遺跡から出土している搬入土器の関係からも指摘することができる。まず、テオティワカンでも出土している細粒石包含桃白色土器の生産地がゲレロ州とモレーロス州の州境にあることから、トルーカ盆地を経由したこの生産地とテオティワカンの間の交易ルートが想定できる。

さらに、サンタ・クルス・アティサパン遺跡における薄手オレンジ色土器の出土量から以下のことが示唆できる。先に述べたように、薄手オレンジ色土器の出土は、テオティワカンと政治・経済的な関係があったことを示す重要な遺物である。しかしながら、サンタ・クルス・アティサパン遺跡での出土量は、他の搬入土器と比較して乏しい。これは、テオティワカンとサンタ・クルス・アティサパンの関係が弱かったことを意味するのではない。むしろ、古典期の間、テオティワカンとトルーカ盆地の関係は、テオティワカンとモンテ・アルバン (Monte Albán) またはマヤ地域の都市国家など独立した国家間同士の関係と異なっていたことを表している。マヤ地域では、この土器の大部分が埋葬施設の副葬品として出土していると述べたが、サンタ・クルス・アティサパン遺跡では、総数340点の内12点が埋葬施設から出土している。上記の出土量の乏しさおよび大部分が包含層から出土していることを考慮すると、以下のように考えられる。この盆地はテオティワカンによって支配されていたため、周辺であるトルーカ盆地から見ても、中心であるテオティワカンから見ても、薄手オレンジ色土器を用いて、在地エリート自身の権威を高める、または逆に、テオティワカンの支配者層が彼らとの関係を強化する必要性が乏しかったのではないかと考える。

トルーカ盆地は、テオティワカンの穀倉地帯として彼らに食料を供給し、さらに、細粒石包含桃白色土器を代表例として、テオティワカンへと必需品または奢侈品を循環させる交易ルートとしての役割も負わされていた。一方、この盆地は支配下にあったため、テオティワカンのシンボルを表す薄手オレンジ色土器の出土は僅かであった。

確かに、このデータのみに基づけば、トルーカ盆地がテオティワカンの一方的な支配を受けていたとの解釈が成り立つだろう。しかし、トルーカ盆地の社会は単にテオティワカンに従属するだけの静的な存在であったのだろうか。サンタ・クルス・アティサパン遺跡における他の搬入土器の流通を考慮する際、上記とは異なったパノラマが見えてくる。

テオティワカンがまだ霸権を保持していた時期、サンタ・クルス・アティサパン遺跡には、テオティワカンで出土していない搬入土器、つまり、雲母多量包含土器と搬入粗製土器そして赤色土器が流通していた。後二者の生産地が理解されていないため、トルーカ盆地がどの地域と交易関係を持っていたのか分からぬ。しかしながら、雲母多量包含土器がミステカ・バハ地域周辺から来ていたのであれば、プエブラ州南域またはゲレロ東域からモレロス州を通ってトルーカ盆地に流通していたと考えられる。さらに、後二者の搬入土器がテオティワカンで出土していないことを考慮すると、テオティワカンを経由しない交易ルートが確立していたのである。

つまり、テオティワカンに依存しない独自の交易ルートが存在していたと考えられるのである。そして、それはテオティワカンに従属する縦の交易システムと、トルーカ盆地独自の経済戦略を示す近郊地域との横の交易システムが同時に存在していたことを示唆している。しかし、テオティワカンの崩壊後、これらの搬入土器がサンタ・クルス・アティサパン遺跡で出土しなくなることを重要視すると、このような横のシステムは必ずしも強固ではなかったことが理解できる。むしろ、この横の交易システムの存在は、メキシコ中央高原でテオティワカンが霸権を維持していたために安定していたと考えられる。これは、雲母多量包含土器の生産地として考えられるミステカ・バハ地域が、テオティワカンと間接的ではあるが交流があったこと [Winter 2006: 115, 2007: 83–106]、さらに、テオティワカン崩壊後、雲母多量包含土器の流通が途絶えることを考慮すると理解できる。

しかしながら、テオティワカンの崩壊後、厚手オレンジ色土器圏が形成されることを考慮すると、トルーカ盆地の地域社会はその崩壊に柔軟に対応し、地域レベルの交易圏を確立させていった。テオティワカンの支配下にありながらも、トルーカ盆地には独自の経済戦略が存在し、中央のみに依存しない周辺と周辺の関係が、崩壊後も継続した社会的安定を維持しただと推測できる。ここに周辺であるトルーカ盆地社会のダイナミズムが展開している。そして、このような周辺地域間の交易システムの存在が、搬入土器によって運ばれる生活必需品や威信材の獲得を可能にし、社会の安定を支えていたと考える。

7. おわりに

本稿では搬入土器の分析から、この土器の利用価値がより実用的であったことを指摘した。そして、テオティワカンで出土しない搬入土器に注目し、テオティワカンに従属する縦のシステムのみならず、横のシステムが存在することを主張した。同時に、このような横の交易システムはテオティワカンの霸権の下で機能していた可能性を指摘した。一方、テオティワカンの衰退後、この横の交易システムは解体し、新たな地域レベルの交易圏が形成されることを述べた。

しかしながら、ハース [Hirth 1984] は単一の遺物の分析から経済システムを復元する危険性を指摘し、経済の多様性を理解するには様々な物資からの分析が必要であることを主張している。

これを考慮すると、トルーカ盆地の社会的安定を持続させた搬入土器とは異なった交易システムが存在していた可能性がある。さらに、フィリーニ [Filini 2004: 109] が指摘するように、古典期のメキシコ中央高原では、テオティワカンの支配的な交易システムのみならず、周辺地域において様々な物資が流通する多面的な交易システムが展開していた可能性も考えられる。本稿ではこれを実証するためのデータを提示していない。しかし、テオティワカン支配期からトルーカ盆地の集団が中央に支配されない多角的経済戦略を用いていたことにより、その崩壊後も、より確実に継続した社会発展を迎えることが可能であったと推測する [Kabata 2007, in press]⁹。

上記の問題について、他の考古遺物から実証していくことが今後の課題である。

【謝辞】

本稿は現在作成中の博士論文の一部を修正・加筆したものである。指導教官である杉浦洋先生には、「サンタ・クルス・アティサパン遺跡発掘調査」への参加機会を与えて頂いただけでなく、多くの点でご指導して頂いた。一方、搬入土器の肉眼分析にあたって、フリオ・カルバハル・カステジャーノス先生 (Julio Carvajal Castellanos) から熱心なご教授を頂いた。さらに本稿執筆中には、村上達也氏ならびに古手川博一氏から多くの助言と協力を頂いた。末筆ながら記して感謝の意を表したい。

【引用文献】

Ball, Joseph W.

- 1983 Teotihuacan, the Maya, and Ceramic Interchange: A Contextual Perspective. In *Highland-Lowland Interaction in Mesoamerica: Interdisciplinary Approaches. A Conference at Dumbarton Oaks October 18th and 19th 1980*, edited by Arthur G. Muller, pp.125-143, Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington D.C.

Blanton, Richard E. and Gary M. Feinman

- 1984 The Mesoamerica World System. *American Anthropologist* 89(4): 673-682.

Canto Aguilar, Giselle

- 2006 La cerámica del Epiclásico de Morelos. In *El fenómeno Coyotlatelco en el centro de México: tiempo, espacio y significado. Memoria del Primer Seminario-Taller sobre Problemáticas Regionales*, edited by Laura Solar Valverde, pp. 361-374. INAH, México, D.F.

Carballo, David Manuel

- 2005 *State Political Authority and Obsidian Craft Production at the Moon Pyramid, Teotihuacan, Mexico*. Ph.D Dissertation. University of California, Los Angeles.

Charlton, Thomas H.

- 1978 Teotihuacán, Tepeapulco, and Obsidian Exploitation. *Science* 200 (4347): 1227-1236.

- 1984 Production and Exchange: Variables in the Evolution of a Civilization. In *Trade and Exchange in Early Mesoamerica*, edited by Kenneth G. Hirth, pp.17-42. University of New Mexico Press, Albuquerque.

Chase-Dunn, Christopher K. and Thomas D. Hall

- 1991 Conceptualizing Core/Periphery Hierarchies for Comparative Study. In *Core/Periphery Relations in Precapitalist Worlds*, edited by Christopher Chase-Dunn and Thomas D. Hall, pp. 5-44. Westview Press, Boulder.

- 1997 *Rise and Demise: Comparing World-Systems*. Westview Press, Boulder.

- 2000 Comparing World-Systems to Explain Social Evolution. In *World System History: The Social Science of Long*

- term Change , edited by Robert A. Denemark, Jonathan Friedman, Barry K. Gills, and George Modelska, pp. 85-111. Routledge, London.
- Coggins, Clemency
- 1983 An Instrument f Expansion: Monte Alban, Teotihuacan, and Tikal. In *Highland-Lowland Interaction in Mesoamerica: Interdisciplinary Approaches. A Conference at Dumbarton Oaks October 18th and 19th 1980*, edited by Arthur G. Muller, pp.49-68, Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington D.C.
- Covarrubias García, Mariana
- 2003 *Arquitectura de un sitio lacustre del valle de Toluca desde finales del Clásico y durante el Epiclásico (550-900 d.C). Una reconstrucción de las estructuras públicas del Montículo 20 de Santa Cruz Atizapán*. Tesis de licenciatura. ENAH, México, D.F.
- Culbert, T. Patrick
- 1993 *The Ceramics of Tikal: Vessels from the Burials, Caches, and Problematical Deposits*. Tikal Report No. 25, part A. The University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Cyphers, Ann and Kenneth G. Hirth
- 2000 Ceramics of Western Morelos: The Cañada through Gobernador Phases at Xochicalco. In *The Xochicalco Mapping Project*, edited by Kenneth G. Hirth, pp. 102-135. *Archaeological Research at Xochicalco Vol. 2*. The University of Utah Press, Salt Lake City.
- Daneels, Annick
- 1996 La relación Teotihuacán-centro de Veracruz: una revaluación. *Revista Mexicana de Estudios Antropológicos XLII*: 145-157.
- Figueroa Sosa, Sandra
- 2006 *Cronología cerámica de los pozos estratigráficos del islote 20b del sitio de Santa Cruz Atizapán, Edo. de México. Clásico y Epiclásico en el valle de Toluca*. Tesis de licenciatura. ENAH, México, D. F.
- Filini, Agapi
- 2004 *The Presence of Teotihuacan in the Cuitzeo Basin, Michoacán, Mexico: A World-System Perspective*. British Archaeological Reports, Achaeopress, Oxford.
- García Cook, Ángel
- 1974 Transición del Clásico al Posclásico en Tlaxcala: fase Tenayecac. *Cultura y Sociedad* 1(2): 83-98.
- Gazzola, Julie
- 2004 Uso y significado del cinabrio en Teotihuacan. In *La costa del Golfo en tiempos teotihuacanos: Propuestas y perspectivas. Memoria de la Segunda Mesa Redonda de Teotihuacan*, edited by María Elena Ruiz Gallut and Arturo Pascual Soto, pp. 541-569. INAH, México, D.F.
- Giles Flores, Ivonne Estela
- 2002 *La cerámica y el uso del espacio en el sector suroeste del islote 20B de Santa Cruz Atizapán, Estado de México: Clásico tardío y Epiclásico*. Tesis de licenciatura. ENAH, México, D. F.
- González de la Vara, Fernán
- 1999 *El valle de Toluca hasta la caída de Teotihuacan*. Colección Científica, Núm.389. INAH, México, D.F.
- Hall, Thomas D. y Christopher K. Chase-Dunn
- 1996 Comparing World-Systems: Concepts and Hypotheses. In *Pre-Columbian World Systems. Monographs in World Archaeology No. 26*, edited by Peter N. Peregrine and Gray M. Feinman, pp. 11-25. Prehistory Press, Madison.
- Hirth, Kenneth G.
- 1984 The Analysis of Prehistoric Economic Systems: A Look to the Future. In *Trade and Exchange in Early Mesoamerica*, edited by Kenneth G. Hirth, pp. 281-302. University of New Mexico Press. Albuquerque.
- 1998 A New Way to Identify Marketplace Exchange in the Archaeological Record. *Current Anthropology* 39(4):

- 451-476.
- Hirth, Kenneth G. and Ann Cyphers Guillén
 1988 *Tiempo y Asentamiento en Xochicalco*. UNAM, México, D.F.
- Hirth, Kenneth and Jorge Angulo Villaseñor
 1981 Early State Expansion in Central Mexico: Teotihuacan. *Journal of Field Archaeology* 8(2): 135-150.
- Kabata, Shigeru
 2007 *Obsidian Procurement Strategies in the Toluca Valley before and after the Fall of the Teotihuacan System*. Paper presented at the 72th Annual Meeting of the Society for American Archaeology, Austin, Texas.
- in press Sistema de abastecimiento de obsidiana en el valle de Toluca durante el Clásico tardío y el Epiclásico. In *Memoria del Primer Simposio de Arqueología: el pasado del Estado de México*, edited by Miguel Guevara. UAEM, Toluca.
- Kelley, John Charles
 2002 [1979] An Archaeological Reappraisal of the Tula-Toltec Concept, as Viewed from Northwestern Mesoamerica. In *Homenaje al Dr. John Charles Kelley*, edited by María Teresa Cabrero, Jaime Litvak, and Meter Jiménez, pp.99-121. UNAM, México, D.F.
- Kepcs, Susan and Philip Kohl
 2003 Conceptualizing Macroregional Interaction: World-Systems Theory and the Archaeological Record. In *The Postclassic Mesoamerican World*, edited by Michael E. Smith and Francis F. Berdan, pp. 14-20. University of Utah Press, Utah.
- Kolb, Charles
 1986 Commercial Aspects of Classic Teotihuacan Period "Thin Orange Wares". In *Research in Economic Anthropology, Supplement No. 2: Economic Aspects of Prehispanic Highland Mexico*, edited by Barry L. Isaac, pp. 155-205. JAI Press, Greenwich.
- 1987 *Marine Shell Trade and Classic Teotihuacan, Mexico*. Bar International Series 364. British Archaeological Reports, Oxford.
- López Juárez, Julieta Margarita
 2006 *La pizarra de la antigua ciudad de Teotihuacan. Tipología e interpretación*. Tesis de licenciatura. ENAH, México, D.F.
- Manzanilla, Linda
 1983 La redistribución como proceso de centralización de la producción y circulación de bienes: Análisis de dos casos. *Boletín de Antropología Americana* 7:5-18.
- 1992 The Economic Organization of the Teotihuacan Priesthood: Hypotheses and Considerations. In *Art, Ideology, and the City of Teotihuacan: A Symposium at Dumbarton Oaks 8th and 9th October 1988*, edited by Janet Catherine Berlo, pp.321-338, Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington D.C.
- 1997 Teotihuacan: Urban Archetype, Cosmic Model. In *Emergence and Change in Early Urban Societies*, edited by Linda Manzanilla, pp. 109-131. Plenum Press, New York.
- 2004 Social Identity and Daily Life at Classic Teotihuacan. In *Mesoamrican Archaeology: Theory and Practice*, edited by Julia A. Hendon and Rosemary A. Joyce, pp. 124-147. Blackwell Publishing, Oxford.
- 2006 Estados corporativos arcaicos. Organizaciones de excepción en escenarios excluyentes. *Cuicuilco* 13(36): 13-45.
- Marcus, Joyce
 1983 Topic 53: Teotihuacán Visitors on Monte Albán Monuments and Murals. In *The Cloud People: Divergent Evolution of the Zapotec and Mixtec Civilizations*, edited by Kenneth V. Flannery and Joyce Marcus, pp. 175-181. Academic Press, New York.
- 2003 The Maya and Teotihuacan. In *The Maya and Teotihuacan: Reinterpreting Early Classic Interaction*, edited by

- Geoffrey E. Braswell, pp. 337-356. University of Texas Press, Austin.
- Mastache, Alba Guadalupe, Robert Cobean, and Dan Healan
- 2002 *Ancient Tollan. Tula and the Toltec Heartland*. University Press of Colorado, Boulder.
- Millon, René
- 1981 Teotihuacan: City, State, and Civilization. In *Supplement to the Handbook of Middle American Indians, Volume One: Archaeology*, edited by Victoria Reifler Bricker and Jeremy A. Sabloff, pp.198-243. University of Texas Press, Austin.
- 1992 Teotihuacan Studies: From 1950 to 1990 and Beyond. In *Art, Ideology, and the City of Teotihuacan: A Symposium at Dumbarton Oaks 8th and 9th October 1988*, edited by Janet Catherine Berlo, pp.339-429, Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington D.C.
- Ortiz, Ponciano and Robert Santley
- 1998 Matacapan: un ejemplo de enclave teotihuacano en la Costa del Golfo. In *Los ritmos de cambio en Teotihuacán: Reflexiones y discusiones de su cronología*, coordinated by Rosa Brambila and Rubén Cabrera, Colección Científica, Núm. 366, pp. 377-460. INAH, México, D.F.
- Peregrine, Peter
- 1996 Introduction: Works-Systems Theory and Archaeology. In *Pre-Columbian World Systems. Monographs in World Archaeology No. 26*, edited by Peter N. Peregrine and Gray M. Feinman, pp. 1-10. Prehistory Press, Madison.
- 2000 Archaeology and World-Systems Theory. In *A World-Systems Reader: New Perspectives on Gender, Urbanism, Cultures, Indigenous Peoples, and Ecology*, edited by Thomas D. Hall, pp. 59-68. Rowman & Littlefield, Lanham.
- Price, Barbara J.
- 1986 Teotihuacan as World-System: Concerning the Applicability of Wallerstein's Model. In *Origen y formación del Estado en Mesoamérica*, edited by Andrés Medina, Alfredo López Agustín, and Mari Carmen Serra, pp. 169-194. UNAM, Mexico, D.F.
- Rattray, Evelyn C.
- 1987 Evidencia cerámica de la caída del Clásico en Teotihuacan. In *El auge y la caída del Clásico en el México central*, edited by Joseph B. Mountjoy and Donald L. Brockington, pp. 77-85. UNAM, México, D.F.
- 1990 New Findings on the Origins of Thin Orange Ceramics. *Ancient Mesoamerica* 1: 181-195.
- 1998 Rutas de intercambio en el periodo Clásico en Mesoamérica. In *Rutas de intercambio en Mesoamérica: III Colloquio Pedro Bosch-Gimpera*, edited by Evelyn Childs Rattray, pp. 77-100. UNAM, México, D.F.
- 2001 *Teotihuacan: Cerámica, cronología y tendencias culturales*. INAH, México, D.F.
- Reyna Robles, Rosa Ma.,
- 2003 *La Organera-Cochipala: un sitio del Epiclásico en la región Mezcal de Guerrero*. Colección Científica, Núm. 453. INAH, México, D.F.
- Rosales de la Rosa, Edgar Ariel
- 2004 *Usos, manufactura y distribución de la mica de Teotihuacan*. Tesis de licenciatura. ENAH, México, D.F.
- Santley, Robert. S.
- 1983 Obsidian Trade and Teotihuacan Influence in Mesoamerica. In *Highland-Lowland Interaction in Mesoamerica: Interdisciplinary Approaches*, edited by Arther G. Miller, pp.69-124. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington D.C.
- 1984 Obsidian Exchange, Economic Stratification, and the Evolution of Complex Society in the Basin of Mexico. In *Trade and Exchange in Early Mesoamerica*, edited by Kenneth. G. Hirth, pp.43-86. University of New Mexico Press, Albuquerque.
- 1989 Obsidian Working, Long-Distance Exchange, and the Teotihuacan Presence on the South Gulf Coast. In

- Mesoamerica after the Decline of Teotihuacan, A.D. 700-900*, edited by Richard A. Diehl and Janet Catherine Berlo, pp. 131-151. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.
- Santley, Robert S. Janet M. Kerley, and Ronald R. Knnebone
- 1986 Obsidian Working, Long-Distance Exchange, and the Politico-Economic Central Mexico. In *Research in Economic Anthropology, Supplement No. 2: Economic Aspects of Prehispanic Highland Mexico*, edited by Barry Isaac, pp. 101-132. JAI Press, London.
- Santley, Robert. S. and Philip J. Arnold III
- 2004 El intercambio de la obsidiana y la influencia teotihuacana en la Sierra de los Tuxtlas. In *La costa del Golfo en tiempos teotihuacanos: Propuestas y perspectivas. Memoria de la Segunda Mesa Redonda de Teotihuacan*, edited by María Elena Ruiz Gallut and Arturo Pascual Soto, pp. 115-138. INAH, México, D.F.
- Santley, Robert S. and Rani T. Alexander
- 1996 Teotihuacan and Middle Classic Mesoamerica: A Precolumbian World System?. In *Arqueología Mesoamericana: Homenaje a William T. Sanders*, edited by Alba Guadalupe Mastache, Jeffrey R. Parsons, Robert S. Santley, and Mari Carmen Serra Puche, pp. 173-194. UNAM, México, D.F.
- Silis García, Omar
- 2005 *El ritual lacustre en los islotes artificiales de la ciénega de Chignahuapan, Santa Cruz Atizapán, Estado de México*. Tesis de licenciatura. ENAH, México, D.F.
- Schmidt Schoenberg, Paul
- 1990 *Arqueología de Xochipala, Guerrero*. UNAM, México, D.F.
- Schneider, Jane
- 1991 [1977] Was There a Precapitalist World-System? In *Core/Periphery Relations in Precapitalist Worlds*, edited by Christopher Chase-Dunn and Thomas D. Hall, pp. 45-66. Westview Press, Boulder.
- Smith, Michael E. and Francis F. Berdan
- 2003 (editor) *The Postclassic Mesoamerican World*. University Utah Press, Salt Lake City.
- Spence, Michael W.
- 1981 Obsidian Production and the State in Teotihuacan. *American Antiquity* 46(4):769-788.
- 1984 Craft Production and Polity in Early Teotihuacan. In *Trade and Exchange in Early Mesoamerica*, edited by Kenneth G. Hirth, pp.87-114. University of New Mexico Press, Albuquerque.
- 1987 La evolución del sistema de producción de obsidiana en Teotihuacan. In *El auge y la caída del Clásico en el México central*, edited by Joseph B. Mountjoy and Donald L. Brockington, pp. 87-128. UNAM, México, D.F.
- Stein, Gil J.
- 1999 *Rethinking World-systems: Diasporas, Colonies, and Interaction in Uruk Mesopotamia*. University of Arizona Press, Tucson.
- Stuart, David
- 2000 The Arrival of Strangers: Teotihuacan and Tollan in Classic Maya History. In *Mesoamerica Classic Heritage: From Teotihuacan to the Aztecs*, edited by David Carrasco, Lindsay Jones and Scott Sessions, pp. 465-513. University Press of Colorado, Boulder.
- Sugiura, Yoko
- 1998a *Informe técnico del Proyecto Arqueológico de Santa Cruz Atizapán*. Informe presentado al CONACyT.
- 1998b Desarrollo histórico en el valle de Toluca antes de la Conquista española: Proceso de conformación pluriétnica. En *Estudios de Cultura Otopame*, pp. 99-122. UNAM, México, D.F.
- 1998c *La caza, la pesca y la recolección: etnoarqueología del modo de subsistencia lacustre en las ciénegas del Alto Lerma*. UNAM, México, D.F.
- 2000 *Proyecto Arqueológico de Santa Cruz Atizapán. Segunda temporada*. Informe presentado al Consejo Nacional de Arqueología del INAH, México, D.F.

- 2002 *Informe técnico del Proyecto Arqueológico de Santa Cruz Atizapán. Tercera temporada*. Informe presentado al Consejo Nacional de Arqueología del INAH, México, D. F.
- 2005a *Y atrás quedó la Ciudad de los Dioses. Historia de los asentamientos en el valle de Toluca*. UNAM, México, D. F.
- 2005b El hombre y la región lacustre en el valle de Toluca: proceso de adaptación de los tiempos prehispánicos. In *Arqueología Mexicana. IV Coloquio Pedro Bosch Gimpera*, edited by Ernesto vargas Pacheco, pp. 303-329. UNAM, México, D.F.
- Sugiura, Yoko and Rubén Nieto Hernández
- 1987 La cerámica con Engobe Naranja Grueso: un indicador del intercambio en el Epiclásico. In *Homenaje a Román Piña Chán*, edited by Carlos Navarrete, Lorenzo Ochoa, Mari Carmen Serra, and Yoko Sugiura, pp.455 -466. UNAM, México, D. F.
- Wallerstein, Immanuel
- 1974 *The modern World-System: Capitalist Agriculture and the Origins of the European World-Economy in the Sixteenth Century*. Academic Press, New York.
- Winter, Marcus
- 2006 La cerámica del periodo Clásico de la Mixteca Alta y la Mixteca Baja de Oaxaca. In *La Producción Alfarera en el México Antiguo II*, edited by Beatriz Leonor Merino Carrión and Ángel García Cook, pp. 91-118. INAH, México D.F.
- 2007 *Cerro de las Minas. Arqueología de la Mixteca Baja*. INAH, Oaxaca.

註

- 1 サンタ・クルス・アティサパン遺跡では、メキシコ国立自治大学（Universidad Nacional Autónoma de México）・人類学調査研究所（Instituto de Investigaciones Antropológicas）に所属する杉浦洋教授の指揮の下、「サンタ・クルス・アティサパン遺跡考古学発掘調査(Proyecto Arqueológico del Sitio de Santa Cruz Atizapán)」が1997年から2005年までの間に、5期（1997, 2000, 2001, 2004, 2005年）の発掘調査が実施されている。筆者は4次及び5次調査に参加し、発掘と測量調査に従事した。
- 2 ウォーラースteinの『近代世界システム論（The Modern World-System I）』の上梓（1974年）以来、彼の主張する世界システム論の有効性を認める考古学研究者は多い [e.g., Schneider 1991 [1977]; Blanton and Feinman 1984; Peregrine 1996, 2000; Smith and Berdan 2003; Kepecs and Kohl 2003]。この考えが考古学者にとって魅力的であるのは、世界システムが自給可能な一つの地理的領域を経済的に形成しながら、その内部には多数の独立した政治システムが存在している点にある。つまり、異なる政治システム間の相互影響を問題にする際、それらを包含する経済圏というマクロな視点からの分析が可能になる。しかしながら、上記の研究者らはこの有効性を認めながらも無批判にウォーラースteinの視点を援用しているのではない。
- 3 1997、2000、2001年の3期に渡り「マウンド20」地区が発掘調査された [Sugiura 1998a, 2000, 2002]。数多く確認されている他のマウンドからこの地区が調査された理由は、以下の通りである [Sugiura 1998a: 29]。①他のマウンドと比較し「マウンド20」の平面規模が最大である。②現在農耕地として利用されていない。③サンタ・クルス・アティサパン遺跡自体が現在、農耕地として利用されており、「マウンド20」周辺に設置されている排水溝を利用した断面観察が可能である。④この断面観察により層位が確認できる。⑤チグナウアパン湖に隣接しているため、有機遺物の保存状態が良い。⑥地方自治体のゴミ集積地としての危機にさらされている。⑦表面採集調査の結果、多数の考古学遺物が確認されている。
- 4 「マウンド13」地区の発掘は、2001年の3次調査で実施されたが、その南東部のみが発掘された。「マウンド20」地区の中心部より、30mほど北の所に位置している。
- 5 当然のことながら、トルーカ盆地内で実施された他の遺跡からの搬入土器の分析結果と比較する必要が

ある。しかし、残念ながら現状は、サンタ・クルス・アティサパン遺跡以外の遺跡から、本研究の対象となる層位学的発掘調査に基づいた資料は皆無である。

- 6 1次調査から回収された在地ならびに搬入土器の肉眼分析のデータ結果は、フィゲロア・S [Figueroa S. 2006]、ロドリゲス・L [Rodríguez L. 2005]、ギレス・F [Giles F. 2002] から抽出した。2次および3次調査の搬入土器の肉眼分析は筆者が行った。
- 7 例えば、壺形土器では、胴部外面はヘラ調整、内部はナデ調整が一般的である。鉢形土器では、内面はミガキ調整、外面はヘラ調整で成形される傾向が高い。
- 8 註6と同様に、図11作成のためのデータは、上記の学位論文を利用した。2次および3次調査から出土した在地土器の肉眼分析は、現在進行であるため、ここでは分析が完了している1次調査からのデータを使用した。
- 9 筆者は、上記の視点からトルーカ盆地で出土している黒曜石の分析を地域レベルで行っている。分析過程ではあるが、テオティワカンが未だ霸權を維持していた時期から、トルーカ盆地にはテオティワカンを中心とする交易システムとは別のシステムが存在しており、この経済圏にも属していたことがトルーカ盆地の発展に繋がったとの仮説を提示している。この詳細に関しては別稿に譲りたい。

Dinamismo del Valle de Toluca como un Área Periférica : desde la Perspectiva en Santa Cruz Atizapán

Shigeru Kabata

(Doctorado en Antropología, Facultad de Filosofía y Letras, Instituto de Investigaciones Antropológicas, Universidad Nacional Autónoma de México)

Claves: Valle de Toluca, Teotihuacan, Cerámica foránea, Intercambio–Comercio, Particularidad, Área periférica

Es sabido que los vínculos culturales y sociales entre Teotihuacan y el valle de Toluca fueron estrechos y simbióticos durante el horizonte Clásico. Se ha propuesto que el valle fungía como granero para suministrar algunos productos necesarios a la población metropolitana, gracias a la proximidad geográfica entre ellos y la alta productividad alimenticia del valle de Toluca. Los movimientos demográficos en el Río Lerma fueron afectados por el surgimiento y la decadencia de Teotihuacan: En la fase Tzacualli la población de este valle se redujo por la inmigración hacia el valle de Teotihuacan y después se fue recuperando a medida del desarrollo de la metrópoli. Por otra parte, el proceso de la desintegración del sistema teotihuacano provocó una cadena de cambios demográficos en el valle de Toluca debido a la inmigración desde la cuenca de México y la proliferación de sitios durante el Epiclásico. En efecto, se desarrollaron las sociedades de dicho valle y superaron el lapso de inestabilidad provocado por la caída de Teotihuacan sin el orden y la hegemonía de dicho sistema durante el Epiclásico.

Es necesario comprender la razón por la cual el valle de Toluca como un área periférica de dicha metrópoli pudo ser receptor de inmigrantes procedentes de la cuenca de México. Dichos movimientos poblacionales indican que el valle de Toluca estaba controlado por el sistema económico de Teotihuacan como una región periférica. El estrecho vínculo tanto político como económico que mantenía en el valle de Toluca con Teotihuacan conduce a pensar que, como consecuencia del desplome de este importante centro, el valle de Toluca se vería afectado por un significativo debilitamiento.

Sin embargo, el incremento demográfico en esta zona, apunta hacia la migración de los habitantes de Teotihuacan. De aquí surge la pregunta, ¿por qué el valle de Toluca conservó su estabilidad social después del ocaso del sistema teotihuacano? Por una respuesta a la pregunta, el presente trabajo realizó los materiales cerámicos de pastas foráneas recuperados en el sitio de Santa Cruz Atizapán, que dominaba la parte sureste del valle de Toluca y cuyo apogeo llega durante el Epiclásico, tanto a nivel macroscópico

como desde el análisis de distribución espacial de dicho sitio.

En términos generales, la presencia de los materiales cerámicos elaborados con pastas foráneas, se utilizan como evidencia directa o indirecta de la relación de intercambio y/o política, con las regiones originales de las mismas o con otras áreas donde no se producen pero también se encuentran dichas pastas. Como es bien sabido, en las regiones vinculadas con Teotihuacan durante el horizonte Clásico se ha informado de la presencia de cierta cantidad del grupo cerámico Anaranjado Delgado en contextos específicos, sobre todo en entierros.

Sin embargo, casi no aparece este grupo en Santa Cruz Atizapán, comparado con la presencia cuantitativa de otros grupos cerámicos no elaborados en dicho sitio. Esta ausencia no significa que fuesen débiles los vínculos culturales entre Teotihuacan y Santa Cruz Atizapán. Más bien, esto implica que el valle de Toluca probablemente tuviera otro tipo de relación con Teotihuacan diferente a la que tuvieron la urbe y otras regiones durante el Clásico. Es decir, se puede señalar que la relación entre estos no es igual a las de unidades políticas independientes, como entre Teotihuacan y Monte Albán o las ciudades-Estado del área maya, ya sea política o económicamente, sino que Teotihuacan tuvo bajo su control las comunidades asentadas en el valle de Toluca.

Finalmente, a manera de hipótesis, podemos proponer que las sociedades estudiadas del sitio de Santa Cruz Atizapán tuvieron relaciones políticas y económicas con otras regiones diferentes a las que tuvo Teotihuacan, a pesar de que Santa Cruz Atizapán formaba parte del área nuclear del sistema teotihuacano. Es probable que los habitantes del valle de Toluca hayan empleado una esfera económica independientemente a la del sistema teotihuacano, estrategia que les dio cierta estabilidad y que a la vez les permitió continuar su florecimiento durante el Epiclásico. Por consecuencia, después del decaimiento de Teotihuacan, dicho sitio y el valle de Toluca precisamente por estas redes y vínculos económicos pudieron mantener su orden social, aunque su escala fue restringida.

原稿受領日 2007年9月17日

採択決定日 2008年1月18日